メッセージアウトライン
マタイの福音書4：18～25
「弟子たちの召命」

[18-22]「イエスはガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた。『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。』彼らはすぐに網を捨ててイエスに従った。イエスはそこから進んで行き、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイと一緒に舟の中で網を繕っているのを見ると、二人をお呼びになった。彼らはすぐに舟と父親を残してイエスに従った」

バプテスマのヨハネがガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスによって捕らえられて後、イエスはガリラヤ地方で公に福音を宣べ伝えられ始めた。その第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(17)であった。誰でも神の前に自分の罪を認め、悔い改めなければ天の御国、すなわち神の支配される神の国へ入ることができないのである。イエスはこれからその生涯をかけて救いの福音を宣べ伝えられ、人々の罪の贖いのために十字架への道を進んで行かれるのである。

そして今日の箇所を見ると、イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、網を打ったり繕ったりしていた漁師たちをご覧になって、「私について来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう」と声をかけると、彼らは網も舟も父親も残してイエスに従ったとある。

ここだけを読むと、私たちはそんなことがあるのだろうかと思ってしまう。見ず知らずの初対面の男に一声かけられただけで、大の男たちが仕事まで捨ててついて行くものだろうか。

それゆえここではもっと詳しい説明が必要になってくる。福音書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと四つ書かれているのでそれぞれの並行箇所を調べてみる必要がある。この四つの福音書はそれぞれ独自の立場と角度からイエスの生涯を記している。ある個所は簡潔に書かれ、ある個所は他の福音書に書かれていないようなところまで詳しく書かれている。

今回のマタイの並行箇所はマルコの福音書1:16~20に書かれている。しかしここには何も手掛かりとなるようなものはない。ヨハネの福音書1:35~43にも参考箇

所がある。ここを見ると、バプテスマのヨハネの二人の弟子がイエスについて行ったということが書かれている。40節ではそのうちの一人はシモン・ペテロの兄弟アンデレであったということが分かる。そして、その後でアンデレは兄弟のシモン・ペテロをイエスのもとに連れて来て紹介している。これはイエスがまだ南のユダヤ地方におられガリラヤへ行かれる前のことである。さらにルカの福音書4:38を見るとイエスはガリラヤのカペナウムにおいてシモン・ペテロの家に住んでおられたらしいということが分かってくる。さらにルカ5:1~11が今日のマタイのさらに詳しい並行箇所となっている。

イエスはガリラヤで伝道を開始された。そしてその権威ある教えと力あるわざにより、イエスの周りには大勢の群衆が彼を一目見よう、その教えを聞こうとして押し迫るようにしていたのである。イエスはこの群衆に取り巻かれるようにしながらガリラヤ湖のほとりを歩いておられた。これがマタイ4:18の状況であり、一人でひっそりと瞑想にふけりながら散歩していたのではない。

そこに徹夜の漁から帰って来たペテロやアンデレ、ヤコブやヨハネの漁師たちがいたのである。

ルカ5:5を見ると彼らは夜通し働いても何一つ捕れなかったと言っている。それで彼らは舟を降りて網を洗い、ある者たちは浅瀬で何とか少しでも捕ろうと網を打っていたのである。彼らにとって何も捕れないということは死活問題であった。そこへ群衆に囲まれながらイエスがやって来られたのである。イエスはシモン・ペテロの持ち船に乗り、岸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてそこから群衆を教えられたのであった。

そしてその後、イエスはシモン・ペテロに「深みに漕ぎ出して、網を下ろして魚を捕りなさい」と言われた。(ルカ5:4) 本職の漁師が一晩中働いても何も捕れなかったものを大工出身のイエスがもう一度、今度は深みに漕ぎ出して網を下ろして魚を捕りなさいと言うのであった。シモン・ペテロは躊躇したであろうがせっかくのイエスのことばだから顔を立てる意味でやってみようかということだったのかもしれない。しかし、その結果は驚くべきものであった。なんと、網が破れそうになるほどの大漁であり、それを引き上げたところ、助けに来た別の舟共々沈みそうになったのであった。

この結果、シモン・ペテロはイエスの足もとにひれ伏し、「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」と叫んだのであった。(ルカ5:8) シモン・ペテロの

仲間のヤコブとヨハネも同様に驚き、恐れた。(ルカ5:10)

どんな人でも、これだけは自分の領分、これだけは自分に任してほしい、これは自分の専門だと言えることがあるであろう。ペテロやアンデレ、ヤコブやヨハネにとってそれは漁師としての腕前であった。しかし、今、彼らは自分たちの知恵や力のはるかに及ばない恐るべき結果を見、その力を持つイエスという人物を恐れ、ひれ伏したのである。さらに「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」とまで告白したのであった。彼はイエスが普通の人間にはないものを持つ聖なるお方であると感じたのであろう。

しかし、そのイエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう」(マタイ4:19)

「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです」(ルカ5:10)

「彼らはすぐに網を捨ててイエスに従った」(マタイ4:20) 「彼らはすぐに舟と父親を残してイエスに従った」(マタイ4:22)

イエスが言われた「わたしについて来なさい」とは一時的、短期間従えばよいという気軽な招きではない。私に従う者、弟子としてずっとついて来なさいという永久的な師弟関係への招きなのである。この後、彼らはイエスと寝食をともにして福音を伝えるために働くことになり、キリストの教会のための指導者、責任者となっていくのである。

イエスはペテロやアンデレ、ヤコブとヨハネたちを「わたしについて来なさい」と招かれたが、今も、すべての人を同様に招いておられる。それは神の前に、今までの神を知らず、神を求めず、自己中心な生き方を悔い改めて従う生き方である。ガリラヤの漁師たちを、人間を捕る漁師とされたように、イエスは今も、世の人々がご自分の弟子となるように招いておられる。しかし、これは誰もが直接伝道者、宣教師になるということではなく日常生活においてイエスの弟子として良き生き方をして行くことで、できることである。おはようございます。こんにちはと微笑む、その笑顔がその挨拶がイエスのもとに導くきっかけとなるかもしれない。そして、自分を愛するように隣人を愛する。そのような生き方がキリストの香りを放つことになるかもしれない。今自分が置かれているところで、イエスの弟子として自分にできることは何か、神に祈り求めつつ歩んで行くことが大切である。

[23-25]「イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病、あらゆるわずらいを癒された。イエスの評判はシリア全域に広ま

った。それで人々は様々な病や痛みに苦しむ人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒された。こうして大勢の群衆が、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、およびヨルダンの川向うから来て、イエスに従った」

この箇所はイエスのガリラヤ伝道の要約である。イエスはまず会堂で福音を宣べ伝えられた。この会堂はユダヤ人の会堂で礼拝、教育、裁判の三つの機能を果たしていた。礼拝は祈祷、律法と預言者(旧約聖書)の朗読、説教の三部からなり、説教は会堂管理者が適当と思えばだれでもすることが許された。このようにして会堂は最初からイエスに対して開かれていた。そこでイエスは天の御国の福音を宣べ伝えることができた。イエスはガリラヤ全域を巡って活動され、人々のあらゆる病やわずらいを癒され、その評判はパレスチナ北部のシリア全域にまで広まって行った。それで各地から多くの人々がイエスのもとにやって来て、病気の人々はイエスによってみな癒されたのであった。「デカポリス」とは十の都市の意味で、十のギリシア風の独立都市が連合していた地方でガリラヤ湖の南東部に位置していた。さらに首都エルサレムや南部のユダヤ、またヨルダン川東部の地からも人々がやって来てイエスにつき従った。

もし現代にこのような人物が現れたら、私たちはその人に会って見たい、本当なのか自分で確かめてみたいと思い、病やわずらいがある人は癒してほしいと思い、本当に癒す力があると確かめたら、この人はどういう方なのかとますます知りたくなり、つき従って行きたいと思うであろう。

イエスはご自分が神であり、その力を持っていることを示すためにこのような癒しのわざ(奇跡)を行われたのである。イエスは別の場面で「わたしが言うのを信じなさい。信じられないのなら、わざのゆえに信じなさい」と弟子たちに言っておられる。→ヨハネ14:11　イエスのことばには、その裏付けとして力あるわざがともなっているのである。

今日の箇所は単なる作り話ではなく、二千年も前にそれを見た人々が書きとめ、今日まで誤りなく伝えられてきた否定できない事実なのである。

イエスに召されて弟子となったペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネたちは、今度は魚ではなく、人間を捕る漁師としてイエスとともに神の国の福音のために働く者となっていった。

「わたしについて来なさい。人間を捕る漁師にしてあげよう」 このイエスの呼びかけ

は今も響いている。私たちも主イエス・キリストに従う者として弟子としての使命を全うしていく者となりたい。